

ライフストーリー・インタビューの世代間学習としての可能性

中川恵里子[†]

[†] 千葉市青葉看護専門学校非常勤講師

特に社会への移行期にある若者にとって、年配者の生き方に触れることは、自らの生き方をデザインする上で重要な学習機会となるのではなかろうか。とはいえ、老若の自然な交流が家庭や地域社会で失われている今日、こうした世代間のコミュニケーションを促進するためには、何らかの取り組みが必要である。本論では、そうしたアプローチとしてライフストーリー・インタビューに注目する。ライフストーリー・インタビューは質的研究・調査法の一つとして最近注目されているが、本論では、その生成的意味に注目することによって、それを通した世代間学習としての可能性について検討を試みる。具体的には、日本と米国の大学で実施された中高年へのライフストーリー・インタビューの実践を取り上げ、インタビューを通じていかに世代間のコミュニケーションが可能になり、そこから大学生が何を学ぶのかについて分析することを試みる。

キーワード：生き方からの学び、ライフストーリー・インタビュー、世代間学習

目次

1 はじめに

2 ライフストーリー・インタビュー

2.1. ライフストーリー・インタビューとは

2.2 世代間ライフストーリー・インタビュー

3 世代間ライフストーリー・インタビューの事例

3.1 ニューヨーク州立大の介護施設での実践

3.2 団塊世代オーラルヒストリー・プロジェクト

4 ライフストーリー・インタビューの世代間学習

としての可能性

1 はじめに

特に社会への移行期にある若者にとって、年配者の生き方に触れることは、自らの生き方をデザインする上で重要な学習機会になるのではなかろうか。従来、家庭や地域に内包されていたそうした老若の触れ合いは、現代社会において消滅しつつある。であるからこそ、現代の若者にとって、年配者の生き方に触れることは、非日常的なものを発見するような喜びと同時に、自らの生き方を

見つめ直す学びの機会になるようである。とはいえ、今日、こうした世代間のコミュニケーションを促進するには、何らかの働きかけが必要である。本論では、そうしたアプローチとして、ライフストーリー・インタビューに注目する。

ライフストーリー・インタビューは、人生や過去の経験をインタビューすることによって、対象者のアイデンティティや社会を理解するための質的調査法の一つとして、今日注目を集めている。本論では、ライフストーリー・インタビューが内包する生成的側面に注目し、調査法というより、それを通した学習、特に世代間学習としての可能性について検討する。具体的には、日本と米国の大学で実施された中高年へのライフストーリー・インタビューの事例を取り上げ、インタビューを通して世代間のコミュニケーションがいかに成立し、若者がそれを通して何を学ぶのかを、大学生の感想などに基き、明らかにすることを試みる。

なお、米国では、こうした活動は、オーラルヒストリー（口述史）、ライフヒストリー（生活史）などと呼ばれることが多く、オーラルヒストリー・プロジェクト等の名称で、特に1990年代前後から、高校や大学におけるサービス・ラーニング活動の一方法として位置づいてきた。日本では、本論で取り上げる北九州市の例のように、いくつ

かの大学において、主に、歴史・政策研究、地域づくり、ヒューマンサービス等の分野で実施されている。また、NPOなどの市民活動においても、近年、高齢者にライフストーリーの聞き取りを行う活動への若者の参加が増えているという。¹⁾ 本論の構成は、2章で、ライフストーリー・インタビューとは何か、なぜこの方法に注目するのかを論じる。ここでは、ライフストーリーやオーラルヒストリーという類似するアプローチに関する議論を踏まえながら、桜井厚ややまだようこの質的研究方法としての議論、および米国のルバルスキーによる世代間インタビューに関する議論を紹介し、ライフストーリー・インタビューが新たな生き方を創るという生成的側面を持つことに注目する。3章では、日本および米国の大学で実施された世代間ライフストーリー・インタビューの実践例を取り上げる中で、いかに世代間コミュニケーションが成立し、大学生がこうした実践を通して何を得たのか、彼らの感想に基づき分析を試みる。4章では、2章の議論と3章の結果を踏まえながら、ライフストーリー・インタビューの世代間学習としての可能性について考察する。

2 ライフストーリー・インタビュー

2.1 ライフストーリー・インタビューとは

ライフストーリー・インタビューに注目する理由は、インタビューを通して、人生に新たなストーリーがつけられるという生成的側面がライフストーリーでは重視され、そのことが、特に世代間コミュニケーションを通じた学びを考える際に重要であると思われるからである。同じような聞き取りの方法として、ライフヒストリー（生活史）やオーラルヒストリー（口述史）がある。本論の3章で取り上げる北九州市の事例も、実際はライフストーリーではなく、オーラルヒストリー・プロジェクトという名称であった。今日の日本では、オーラルヒストリーはすでに歴史学の領域で一定の市民権を得るまでに至り、特に政治や政策史の分野で脚光をあびている。欧米においては、オーラルヒストリーは学校教育にも積極的に取り入れられ、歴史研究のみならず、世代間交流やコミュニティ学習にも活用されている。米国のサービス・ラーニング活動においても、オーラルヒストリー・プロジェクトが盛んであることは前述した。

こうした中で、本論でライフストーリーを強調する理由は、オーラルヒストリーでは歴史をつくることに重きが置かれるのに対して、ライフストーリーでは人生の意味付けや生き方をつくることに重きが置かれるという点にある。特に、世代間のコミュニケーションや学びを考える際には、そうしたストーリーを通しての学びや生成という視点が重要になるのではなかろうか。なぜなら、こうした学びは学校教育では培にくいものだからである。それゆえ、特に社会に出て行く前の若者にとっては有益な機会となることが予想される。

こうした理由から、本論では、ライフストーリーに注目するが、その実際の使われ方は明確に区別されている訳でなく、研究者の見解も重なっていることが多い。主に研究者の関心がどこにあるかで、両者は区別されていると考えられる。次節では、オーラルヒストリーとの関係を踏まえながら、ライフストーリー・インタビューとは何かを整理する。

2.1.1 オーラルヒストリーとライフストーリー

オーラルヒストリーとライフストーリーはどのように異なるであろうか。オーラルヒストリーについて、御厨貴(2002)は“公人の、専門家による、万人のための口述記録”²⁾と定義し、語り手も聞き手もあえて限定して考えている。わが国では、オーラルヒストリーという言葉こそ最近普及してきているが、民俗学の分野においては、従来から柳田国男や宮本常一などが民衆への聞き取りをもとに作品を生んでいたことを考慮すれば、御厨による限定は、政策決定プロセスへの関心という彼の専門の必要性から出たものと考えられる。

オーラルヒストリーの歴史は、世界各地で多様な形で進展したことが認められている。米国での発展の契機は、1920年代のシカゴ学派によるライフストーリーの方法論にあるが、現在のオーラルヒストリーは、黒人や女性史、特に政治史において発展してきているという。³⁾ここから、米国のオーラルヒストリーはライフストーリーの方法論をその根底に持つことがわかる。

オーラルヒストリーの第一人者、英国の歴史学者P トンプソンは、オーラルヒストリーを以下のよう

に定義している。
“オーラルヒストリーは、人々の周りで構成される歴史である。オーラルヒストリーは人生を歴

史それ自体に組み込み、歴史の範囲を広げていくことである。オーラルヒストリーは英雄を指導者から見出すのではなく、社会の大多数を構成する無名の人々の中に見出す。…オーラルヒストリーは歴史をコミュニティの中に持ち込み、コミュニティの中から歴史を描きだす。オーラルヒストリーは特権を持たない人々、特に年老いた人々が尊厳と自信を持つのを助ける。オーラルヒストリーは、社会階層間、世代間の接触を生み出し、そこから相互理解が生まれる。個人の歴史家と他の人々が意味を共有することによって、一つの場所あるいは時代に所属する感覚を育てることができる。一言で言えば、オーラルヒストリーはより全的な人間を生み出すのである。…オーラルヒストリーとは、歴史の社会的意味を根本的に転換する手段を提供するものである。”⁴⁾

このトンプソンの考え方において、対象が庶民とされている点、そしてオーラルヒストリーが歴史の再構成を媒介に全的な人間を生み出すと主張されている点などは、歴史という視点に基づきながらも、オーラルヒストリーがライフストーリーと非常に近接していることを示している。

2.1.2 ライフストーリー・インタビュー

桜井厚のライフストーリー論

それでは、ライフヒストリー(生活史)はライフストーリーとどこが違うのであろうか。ライフヒストリーを理論化する試み『ライフヒストリーの社会学』(中野・桜井編 1995) ⁵⁾を 1990 年代に編集した桜井は、“ライフヒストリーは、語られるライフストーリーだけでなく、個人的記録などによって構成される個人の伝記のことである”⁶⁾と、ライフヒストリーに関して述べている。

2000 年以降、桜井はライフヒストリーからライフストーリーへの方法的転換を行った。すなわち、歴史や伝記から離れ、人生や過去の経験を聞き取るというライフストーリー・インタビューの方法論を説く中で、ストーリーやナラティブの考え方に接近するのである。桜井によると、“ライフストーリーとは、過去に現在から意味を与えたものであり、そこに曖昧さやごまかしがあるかもしれないことを認めながらも、それらを巧みに選り分けながら、様々なライフストーリーに通底する社会的現実に向かうとするものである”⁷⁾という。彼のライフストーリー論は以下のような特徴を持つ。⁸⁾

①インタビュー(調査者)の役割への注目

- ・ 調査者自身がライフストーリー創出の場の一端を担う。
- ・ 語り手の人生経験を解釈するために必要なのはインタビューの「自己」の人生である。

②ナラティブ・対話的構築主義

- ・ ライフストーリーの意味するストーリー性はナラティブ概念の物語的な視点と通じる。
- ・ ライフストーリーは過去の出来事や経験を表象するというより、＜いま・ここ＞の語り手とインタビューの相互行為から構築された対話構築物である。ライフストーリー・インタビューでは、＜いま・ここ＞を語り手とインタビュー双方の主体が生きているという視点が重要である。

③＜ストーリー領域＞という位相

- ・ ライフストーリー・インタビューは＜会話＞＜物語世界＞＜ストーリー領域＞という 3 つの位相からなる。＜会話＞は＜いま・ここ＞で行われる会話。＜物語世界＞は、＜あのとき・あそこ＞で起こった体験や出来事の展開過程に関する説明で、相互行為から引き出されるが、語り手主導の内容である。従来の研究においてデータとして注意が払われてきた部分といてよい。＜ストーリー領域＞は、「昔のことと思えば、今は極楽」など、語り手が聞き手にその体験がどんな意味を持つかを伝えようとする＜評価＞機能を持つメタ次元の会話であり、＜いま・ここ＞での語り手と聞き手の社会関係を表すものである。対話的構築主義といえども、＜物語世界＞はインタビューの場から一定の自律性で成立しているという限定性に留意すべきである。

やまだようこのライフストーリー論

桜井の対話的構築主義の立場を引き継ぎ、より明確な社会構成主義を主張しながら、ライフストーリーの生成的側面に注目したのがやまだようこといえる。やまだのライフストーリー論の特徴は、以下のようにまとめられる。⁹⁾

①ナラティブ・社会的構成主義

- ・ ライフストーリーはナラティブモデルに位置づく。これがライフヒストリー(生活史)、オーラルヒストリー(口述史)、ライフレビュー(人生回想)との違いである。ライフヒストリーやオーラルヒストリーが歴史的真相に関心を持つのに対し、ライフストーリーでは、いかに人生

が構成され、意味づけられるか、個々の出来事より、それらの解釈や意味づけが重要になる。例えそれが事実と異なる場合であっても、ストーリーの方が重視されるのである。

- ・語られたストーリーはその人に帰属するのではなく、それが語られた相互行為の文脈に依存する。

②生成性・変革性

- ・ライフストーリーは、経験を有機的に組織化し意味づける行為である。語り手と聞き手の相互作用の中で、過去は現在と照合され、再編成され、変容する。絶えずつくられ組み替えられるライブ(生きた)生成プロセスであり、ライフ(人生)を生成的に変化させるという意味で、生成性と未来の人生を変革していく変革性をもつ。

D ベルトーのライフストーリー論

桜井ややまだのライフストーリー論は、対話的構築主義やナラティブの立場をとる点で共通する。こうしたナラティブ・アプローチに対し、ライフストーリーにはそれと対立するリアリズム・アプローチと呼ばれる立場がある。それは、D ベルトーに代表される考え方で、桜井はこれを、「解釈的客観主義」と呼び、ナラティブ主義の方を、「対話的構築主義」と呼んで自らを後者に位置付ける。¹⁰⁾

ベルトー(仏)の「解釈的客観主義」アプローチでは、「知識の飽和」と呼ぶ状態にまで、多数のライフストーリーを集めて帰納的推論を重ねることで、語りによって描き出される社会的現実を客観化しようとする。「知識の飽和」状態とは、そこまで数を増やすと、同一パターンや要素が規則的に表れ、個人的な特性に左右されない「リアリティ」が明確になってくる状態であるという。¹¹⁾

このアプローチに対して、桜井は、“データ収集過程であるインタビューにすでに調査者の解釈が含まれているにも関わらず、語られたライフストーリー・データのみを、インタビュー過程と切り離して分析、解釈できるのだろうか”と疑問を呈し、この方法では、ライフストーリーが持つ<いま・ここ>で構成されるナラティブとしての特性が考慮されていないという。この特性を考慮すると、ライフストーリーをいくつ収集するかは問題でなく、語り手とインタビューの相互行為を基盤としたライフストーリーの構成の在り方こ

そが、分析の立脚点になると桜井はいうのである。¹²⁾

ライフストーリーと「生き方」をつくる学び
本節では、インタビューを通した学びを明らかにするという目的から、特に桜井ややまだの対話的構築主義に沿ってライフストーリー・インタビューとは何かを整理してきたが、社会科学の研究手法としてライフストーリー・インタビューを考える際には、特にリアリティの捉え方に関しては、より詳細な議論が必要であると考えられる。オーラルヒストリーに関して、トンプソンは、“オーラルヒストリーは高齢者が自信を持つのを助け、世代間理解を進め...同時代に所属する感覚を育てる。一言で言えば、より全的な人を生み出す”と論じているが、これは、世代間の学びの可能性を端的に表す見解といえる。欧米ではオーラルヒストリーが教育プログラムに積極的に活用されている事を考えれば、そうした実践の基盤から出た見解といえよう。

特に新たな生き方をつくるという視覚から、桜井ややまだの対話的構築主義の考え方は示唆的である。なぜなら、実際の体験をいかに意味づけるか、出来事それ自体より、それらをどうつなぎ解釈するのかというストーリーが、人が生きる上で主体性を獲得するために重要なことは予想に難くないが、語り手と聞き手の相互行為の中で、そうしたストーリーが組み替えられ、生成的に変化する可能性があることを彼らの議論は示唆しているからである。こうした生成的变化を導くキーとして本論が注目するのが、桜井が<ストーリー領域>(語り手が聞き手にその体験がどんな意味を持つかを伝えようとする評価機能を持つメタ次元の会話)と呼ぶところの会話である。この領域は、従来の研究ではデータ扱いされていなかった部分であるが、<いま・ここ>の相互関係の中から、新たなストーリーの生成を導くために機能するものとして、光を当てる必要があると考えられる。

桜井は、聞き手の役割に注目し、語り手の人生経験を解釈するのに必要なツールは聞き手の「自己」であると論じる。ここから、インタビューを通して聞き手の「自己」が成長することが予想されるが、こうした「自己」の成長に作用するのが、前述した<ストーリー領域>ではなかるうか。

以上のように、桜井ややまだの議論は、ライフ

ストーリーは対話を通して構築されるという見方であるが、実際には、「高齢者はいつも同じことしかいわない」などという若者の意見も少なくない。これは、老若間では時として対話が成立しにくい場合があることを示唆している。そこで、若者が中高年にインタビューを行う世代間ライフストーリー・インタビューの議論を検討していく。

2.2 世代間ライフストーリー・インタビュー

米国の N ルバルスキーは、今日の学校カリキュラムにおいて、人の成長や成熟の意味が、ストーリーから離れ、事実志向的に扱われがちな傾向を憂慮する。¹³⁾そして、それを乗り越える方法として、世代間のナラティブ・アプローチを提起する。

J デューイは、“現在の経験に照らして、過去の経験を統合する要求から人々が学ぶすべての経験は、将来の経験によって修正されるべきものである”と述べている。¹⁴⁾デューイに依拠しながら、ルバルスキーは、“個人的世界についてナラティブを構成する行為こそが、あらゆる世代が学ぶべき基本的方法である”という。彼女は、“高齢者は、過去の経験を統合し、関連づけ、法則化するすぐれた能力を持っており、若者は、ストーリーに関わることを通して、彼らもまた、高齢者のような洞察力を得ることができる”というのである。¹⁵⁾

ルバルスキーは、高齢者の生きてきた軌跡についてストーリーを作成するというインタビューの取り組みを実施する中で、“若者たちは、ストーリーを引き出すような質問を用意することで、聞くだけでなく、ストーリーを創り出す上で協力した”という。若者は、高齢者の価値観に反映させながら、自らの価値観に気づき、一方、高齢者にとっても、人生の発見を始めたばかりの若者と話す機会は輝かしい経験になったという。

彼女は、こうしたインタビューの若者への教育的意義として、教室と実社会をつなぐ経験、過去の出来事に対する質的感触、その中に社会的個人的に参加する感覚、異世代についての知識と理解、人生への洞察をあげている。若者たちは、高齢者や地域社会、歴史に対して理解と尊敬を深める一方で、高齢者は、自らの声や経験が価値を持つことに気づいた。両世代は、相手を理解しようとすることで、自らの固定観念に気づき、双方の生活が異なると同時によく似ていることを発見した。こうして、ストーリーを共有することで、人々が

つながり、過去を再構築し、現在の世界も新たな情報に照らして構築し直すことができることを学んだ。“最も重要なことは、こうした経験によって、若者と高齢者が、ダイナミックで変わり続ける未来、ストーリーを共有できる未来を思い描くことができるようになったことである”という。

¹⁶⁾

ルバルスキーが分析するこれらの効果は、やまだがこのようなライフストーリーの生成的側面が、老若の組み合わせによってより効果的に表れる事を示している。これは、桜井がライフストーリー構築のツールとみなす「自己」が、若者ではアイデンティティ形成期に、高齢者では、エリクソンが老年期の課題と説く、アイデンティティ統合期¹⁷⁾に当たる事と関係しているのだらうか。

やまでは、ライフストーリーでは、事実そのものより、それらの意味づけや関連づけが重要になるという。つながりや関連で捉えるというものの見方が高齢者の特質とすれば、ライフストーリー・インタビューは、高齢者の特質を活かした方法ともいえる。とはいえ、世代間インタビューは老若間でコミュニケーションが成立して初めて可能になることを考慮すると、その具体的方法が問われよう。こうした点に留意しながら、次章では、日本と米国の2つの世代間ライフストーリー・インタビューの具体的実践について分析を試みる。

なお、ルバルスキー自身は、このインタビューの取り組みを、世代間インタビュー (Intergenerational Interview) という名称で表現している。

3 世代間ライフストーリー・インタビュー

一の事例

3.1 ニューヨーク州立大の介護施設での

実践

世代間ライフストーリー・インタビューはどのように教育プログラムとして組み立てられ、それを通して若者は何を心得るのであろうか。米国の大学で1987～1990年に実施された事例を検討する。最近もこうした取り組みは米国の大学で活発に行われているが、特に学生の感想に注目した分析が行われている点で、日本の例と対比させるために本事例を取り上げた。

3.1.1 インタビュー活動の背景

PP パインは、世代間プログラムでは双方向的な関係が強調されるものの、実際には、多くのプログラムが一方向的であるという。そうした中で、双方向的な関係が形成されている例として、ニューヨーク州立大学New Paltz校における3年間にわたるサービス・ラーニング活動を紹介する。その目的は学生と高齢者とのコミュニケーションと相互理解を促進することであり、学生が総合的カリキュラムの一環として、1学期間、介護施設にて体験教育プログラムを受ける中で世代間ライフストーリー・インタビューが実施された。これは、ケアに当たる高齢者に、2時間以上詳細にインタビューし、高齢者の人生を学ぶ試みである。このプロジェクトは、ニューヨーク州の5つの大学のコンソーシアムで同様の介護プロジェクトが実施された中の一つの大学の事例であるが、注目すべきことは、その他の大学からも、ほぼ同様な結果が得られているということである。¹⁸⁾

学生たちは、履修単位取得のためにこの課程に登録し、長期介護についてのセミナー終了後、介護ボランティアとして高齢者の長期介護施設に配属された。活動中、大学のクラスにおいても話し合いが持たれ、介護対象者個人への効果から社会政策に関する事項まで理解の深化が図られた。

学生に課せられた課題の一つに、ケアに当たる高齢者へのインタビューがあった。それには、出生地、子供時代の経験、家族、職業、職歴、面談時におけるその人の身体的、精神的、感情的状態に関する記述が求められた。この課題の意図は、高齢者への理解と交流を深めることであった。課題終了後、学生たちは高齢者に対して機敏になり、政策や長期介護が高齢者の生活にいかに関与するのかを理解するようになった。また、高齢者とのコミュニケーションの取り方を学び、一般の高齢者とも話し合えるようになったという。¹⁹⁾なお、対象とした高齢者の年齢は公表されていない。

3.1.2 インタビューから学生が得たもの

インタビューから学生たちは何を学んだのだろうか。彼らの感想に見出される要素は、①尊敬・親しみや共感、②人生への洞察力や人生哲学、③高齢者への理解と固定観念の払拭、④異世代とのコミュニケーション、⑤地域や歴史への理解、などである。これらは、ルパルスキーが世代間インタビューの教育的意義として論じる点とほぼ

共通するといつてよい。5つは相互排他的なものではなく、互いに関連しあっている。例えば、①の尊敬・親しみや共感などの感情は、②の人生への洞察力や人生哲学、③の高齢者への理解と固定観念の払拭、などの要素と共に学生の感想に多く見出される。また、④の異世代とのコミュニケーションは、学生の感想では、③の高齢者への理解と固定観念の払拭、などの要素と共に出てくることが多い。①～⑥に沿って、スタッフの見解と学生の感想を紹介する。なお、下線部は、桜井の説く<ストーリー領域>に相当すると思われる部分である。

①尊敬・親しみや共感

スタッフの一人は、次のように述べている。

“学生たちは高齢者に対する尊敬の念を培った。それは、高齢者が多難な生活に対処し、安易な生活を送ってきたわけではない事を学んだからである。高齢者が経験してきた厳しい人生に敬意を表すると同時に、苦しい時代を生き抜いてきた不屈の精神と強靱さに励まされたのである。”²⁰⁾

この尊敬・親しみや共感、②～⑤として分類した感想にも共通して出てくる要素であるため、ここでは感想文の紹介は省略する。

②人生への洞察力や人生哲学

(学生の感想)

- ・ 僅か5フィートの身長ながら、S氏は私が出会ったこともないほど強い人です。…彼は圧力への対応の仕方を教えてくれ、厳しい時代も必ず良い時が来るという見方ができるようになった。
- ・ A氏の生き方は、単に過去だけでなく、人生や生き方を私に教えてくれた。命の長短は自分の力ではどうにもならない。しかし、人生を精一杯生き、その中で出会いを楽しむことは私たちの責任である。なぜなら、人生とは、人に伝えていくことから生まれるからである。
- ・ 人生について、また女性として年を重ねることとはどういうことかを学んだ。このインタビューを通して、生きていく中で最も重視しなければならないことへの理解の仕方がかわってきた。
- ・ この体験が、他の方法では知るべくもない人生への洞察力を与えてくれた。自分の人生や知識を分かち合いたい高齢者が多い事を知った。²¹⁾

③高齢者への理解と固定観念の払拭

スタッフの一人は以下のように観察している。
“高齢者たちは、彼らが、考え、学び、教えることができる人として扱われた時、実に上手な受

け答えをすることに学生は気づいた。そして、自らの高齢者への固定観念に疑問をもつと同時に、年をとるとはどんなことか、高齢者の立場に身をおいてみた。学生も自分の体験を高齢者に話すようになり、高齢者も若者への尊敬の念を深めた。”²²⁾

こうして双方向的対話が発展したのである。

以下は学生の感想からの抜粋である

- ・ 高齢者は我儘で自己中心的だという印象を持っていた。しかし、会って話をしているうちに、すべての高齢者がそうではないことに気づいた。Mさんは、自分の話を聞いてくれる人には時間を割いて話そうとする。彼女が高齢者への固定観念を打破してくれた。
- ・ 楽天的なお年寄りと話ができたおかげで、年をとることは人生をよりよくするものだと思うようになった。70歳であるという事は、年を重ねて自分の信条を強く持つようになることだ。²³⁾

④地域社会や歴史への理解

- ・ A氏は過去を回想する機会を得て、多くの記憶を蘇らせた。私も、不況、人種差別、戦争の事などを聞いて、人生について考える機会を得た。
- ・ 彼は彼と私の世代の違いについて語ってくれた。人の人生について聞くことは私の願いだった。本で読むより、経験を直に聞くことで、歴史が目の前に存在する、そうした現実を感じた。²⁴⁾

⑤異世代とのコミュニケーション

- ・ 自分を被介護者の立場に置くことができた。その人が直面する状況に、自分ならどう対応するのかを考えてみた。この体験から、異世代へのコミュニケーションや接し方を学んだ。
- ・ CさんとFさんは、考えや趣味を質問したとき、好意的に答えてくれた。2人によると、他の人はこんな風には話してはくれないという。一人の人として接することができ、嬉しかった。²⁵⁾

3.1.3 考察

インタビューの経験後、学生は気難しい高齢者ともうまくやれるようになり、介護活動においても施設職員の大きな助けとなった。必須時間終了後も、ボランティア活動を続けた者もいたという。これは、長期介護というサービス・ラーニング活動の中でライフストーリー・インタビューが実施された例だが、スタッフの一人は、“多くの学生が、高齢者の人生についての話は、大学の授業に

ない視点を提供してくれたこと、この経験が職業選択や将来設計に大きな影響を及ぼしたことを認めている”²⁶⁾と述べており、施設職員によると、介護関係の仕事情報を求めてきた者もいたという。

学生の感想やスタッフの見解から、学生が高齢者のストーリーに関わることを通して、将来的展望につなげるような生成的学びが成立したといえる。こうした学びにつながる要素は、主に②人生への洞察や人生哲学、の項に見出すことができる。下線を引いた「厳しい時代も必ずよい時が来る...」「人生を精一杯生き、その中で出会いを楽しむ...」などは、おそらく高齢者が語った言葉であり、彼らの体験からでた教訓や生き方の哲学、すなわち桜井が<ストーリー領域>と呼ぶ、高齢者の人生からの若者へのメッセージと捉えることができる。このメッセージを若者は確かに受け取り、自らの生き方に活かそうとしているのである。ルバルスキーは、若者もストーリーに関わることを通して、高齢者のような人生への洞察力を得ることができると説くが、これは、高齢者の個々の体験それ自体からというより、そうした体験をどのように高齢者が自らの生き方につなげているかというストーリーに、学生は大きなインパクトを受けているといえよう。なお、教育活動として世代間インタビューを組み立てるために留意すべき点としては以下の事項があげられる。

①「共通の基盤」を探すこと

高齢者にインタビューを行う際に、バインが特に重要視するのが、「共通の基盤」である。²⁷⁾

“高齢者と話をする時は、「共通の基盤」を探すと、楽しい場となり、得るものも大きくなる。これは共通に知るコミュニティや、同程度の経験を有する事が適する。高齢者はその人の人生に興味を示す者には応えてくれるものである。”

②コミュニケーションの指導

高齢者とのコミュニケーションを成功させるために、事前にガイダンスが行われた。そこでは、高齢者に話しかける時に、‘honey’, ‘cute’等の言葉を使って子供扱いしない事、敬語の使い方、応答の仕方等に関して指導が行われた。²⁸⁾

③施設側の協力

介護施設側の配慮も忘れてはならない。施設

側で、若者と興味を共にできそうな者、親しみやすい者、相応しい日時を選んでくれた。にも関わらず、対人関係上のトラブルが起こったこともある。しかし、全体として、施設側も恩恵を享受できるような交流ができたという。²⁹⁾

3.2 団塊世代オーラルヒストリー・プロジェクト

日本においても最近、同様の活動が盛んになってきている。ここでは、元気な中高年、団塊世代と大学生のコミュニケーションを促進する大学教育プロジェクトを検討する。団塊世代は、55～60代の人々であり、第3期の重要な担い手である。人生後半期をどう生きるかという入口にあって、それまでの人生の振り返りが求められる時期といえる。前節の介護施設の高齢者とは、国も世代も異なるため、単純に比較できないが、ライフストーリーを通しての学びを検討する上で、これから社会に旅立つ大学生と第2の人生を模索する団塊世代の組み合わせは注目すべき事例といえる。

3.2.1 インタビュー活動の背景

北九州市では、団塊世代が大量に定年退職を迎える「2007年問題」を先取りし、団塊世代を対象に、地域リーダー育成のための「生涯現役夢追い塾」が2006年に創設された。この塾の目的は、第2の人生の進路決定を目指すことである。「団塊世代オーラルヒストリー・プロジェクト」は、この「生涯現役夢追い塾」活動の一環として誕生し、塾生である団塊世代の人々の人生や夢について地元大学生が聞き取り、筆記する活動である。こうした「世代間の生き様の継承」を通して、団塊世代の経験に裏打ちされた言葉が学生の進路決定に大きな影響を与えているという。³⁰⁾

プロジェクトは、世代を超えた交流の機会をと、塾運営に関った北九州市立大大学院マネジメント研究科の城戸宏史が提案し、北九州市、塾を運営するNPO「里山を考える会」が協力した。プロジェクトでは、九大、西南学院大、北九州市大の学生56人が塾生に一对一でこれまでの人生や今後の展望についてインタビューし、塾生の生き方や夢を浮き彫りにすることが試みられた。城戸は、インタビューの様子をこう表現している。

“塾生も当初はためらいがみられたが、次第に熱が入り、時間をオーバーする例が続出した。学

生からは、もっと話を聞きたいと再インタビューの依頼が出るほどだった。人生を熱く語る塾生の真摯な態度、人生の先輩としてのメッセージは、社会に旅立つ前の学生の心に響いた。…学生には貴重なフィールドワークの機会であり、自らのキャリアデザインに参考になる一方で、塾生にも刺激のようだった。…塾生の多くは、事前に自分の半生を振り返り、体系的に整理してインタビューに臨み、中には原稿を用意する者まで現れた。そして、大学生の素直な感性による塾生の夢に関する「キャッチ」が生まれた。そこには、自分の半生や夢が第三者によって言葉にされることによる気づきがあり、さらに塾生の意欲が高まった。”³¹⁾

“団塊世代の塾生には、地域に役立ちたいと思いながら、それまでばく然としていたところがあった。この機会が自らの人生や目標を整理する契機になり、一方、学生らは、親や周囲には正面から聞きにくい人生観や社会経験を知ることができた”(2007年4月27日(金)西日本新聞)

インタビュー成果は、「夢追い人」という冊子にまとめられ、2007年と2008年に出版された。また、このプロジェクトを核とした「夢追いサミット」が内閣府の市民活動団体支援事業の一つに選ばれ、地域・世代間交流を行う大事業となった。³²⁾

なお、当プロジェクトの名称はオーラルヒストリーであるが、本論ではライフストーリーとして取り上げた。その理由は、聞き手である大学生へのメッセージ性が強く、聞き手の存在が大きな役割を果たしている点と、書かれた物語については、事実確認以外は、聞き手である大学生の解釈が尊重されたという点で、ヒストリー性よりストーリー性が重視されていると判断したからである。

3.2.2 大学生がインタビューから得たもの

それでは、大学生はインタビューを通して団塊世代から何を学んだのであろうか。冊子「夢追い人」の冒頭で、故筑紫哲也が“団塊世代と若者は夢という点で共通している”³³⁾ことを指摘し、城戸は、“団塊世代が夢を宣言することで、大学生は夢の描き方を指南されている”³⁴⁾と述べている。とはいえ、塾生も、初めから自らの夢に自覚的であったわけではなく、大学生に語ることを通して夢に目覚め、大学生が書いた文章を読み、それを再認識したのである。こうした相互行為を通して、両

世代は新たな未来を描き始めたといえる。

ここで「夢」は、両世代をつなぐキーといえるが、学生の感想を読むと、「夢」を媒介にしながら、前節と同じ①～④の学びの要素を見出すことができる。4つは互いに関連しあっているのは前節と同様である。しかし、本例の場合は、②に属する感想が非常に多く、実際は、感想のほとんどが、感銘を受けたものとして、人生への洞察や人生哲学的な要素をあげている。ここから、大学生が塾生のライフストーリーから学んだものは、人生への洞察力や人生哲学といっても過言ではない。なお、本例では、⑤異世代とのコミュニケーション、に類する感想は見いだせなかった。団塊世代という比較的若い世代のため、コミュニケーション上の問題は意識されないのかもしれない。掲載した感想における下線は、前例と同様、桜井の説く＜ストーリー領域＞に相当すると思われる部分である。以下は①～④に相当する感想(抜粋)である。³⁵⁾

① 尊敬・親しみや共感

- ・ 一人の働く女性の半生を伺うことができ、乗り越えたものの多さに、女性は強いと感じた。人とのつながりを大切にというAさんの思いには強く共感した。...どんな困難も楽しむAさんを見て、私もいつも前向きでいたいと感じた。
- ・ 「中国語を勉強したい」というIさん。「70まで働けるかな」と笑う姿はバイタリティの塊のようだ。...自分から行動する大切さを教えられた。

② 人生への洞察力や人生哲学

- ・ 「苦しければ苦しいほど後でいい思い出になる。だから挫折だと思っていない」と語るAさんの目は輝いて見えた。...「仕事ではストレスばかり溜まるだろう」と思っていた。だが、Aさんは、「仕事が自分を成長させた」と語る。これから就職活動始める私に「会社は自分の人格を磨く場である」という言葉くれた。労働によって人の能力は開花するものかもしれない。
- ・ 「人に聞くだけでなく、体験なさい。そうすれば言うことに説得力がつくから」というFさんに勇気づけられ、困難を避けようとしていた自分の甘さに気づいた。これからは、「何ができるか」だけでなく、どんな壁を乗り越えていくかを考え、行動に移せるようになりたい。
- ・ Nさんの話の中で、「禍福は交互にやってくる」「人生に無駄な時間はない」という言葉が印象

的だった。これから多くの困難に直面すると思うが、次への試練だと思い前向きに生きたい。

- ・ 「人に認められたい」というのではなく、「どうか認めさせてやる」と思う強い心が大事だとYさんの話を聞いて思った。

③ 中・高年齢への理解と固定観念の払拭

- ・ 定年に近い方々がこんなに生き生きとされていることを知り、大変驚いた。穏やかに暮らすことを夢見ている方々かと思っていた。...私たちも精一杯生きていかねばと思った。

④ 地域社会や歴史への理解

- ・ 現役の社長であるTさんの中小企業の現状についての話は貴重であった。...今の若者に対して、「思いやりある人と連携・協力していくこと」という意見をもらい、そのためにも「信頼を裏切らない」ことが大事だと思った。

3.2.3 考察

②に属する感想が非常に多いことから、大学生が団塊世代へのインタビューを通じて学んだのは、「夢の描き方」というより、人生への洞察や人生哲学といえるものであることがわかる。これは、桜井の説く＜ストーリー領域＞を示す下線部と多くが重なっていることから、＜ストーリー領域＞を通して、学生は人生への洞察や人生哲学を学んだといえてよさそう。そして、特に職業生活が関わるところに学生の関心が集中している。こうした人生哲学への関心は、前節の米国の介護施設の例でも若干は見られたが、本例では、非常に多くの学生が、塾生から得たメッセージとして、彼らの人生体験から出た哲学ともいえる言葉(下線部)を感想の中であげている。例えば、「苦しければ苦しいほど後でいい思い出になる」などがそうである。すなわち、学生が強いインパクトを受けたのは、年配者の体験した出来事それ自体ではなく、そうした体験を年配者がどう捉え、生き方や人生哲学に活かしているかというストーリーなのである。そうしたストーリーが凝縮された＜ストーリー領域＞を、学生はメッセージとして素直に受け止め、自らの「これから」を描こうとしている。インタビューを通して生成的な学びが成立したとすれば、それには、こうした＜ストーリー領域＞が大きな効果を発揮しているといえよう。

一方、インタビューを通じて歴史や地域社会に関して学んだという感想はほとんど見いだせな

い。米国の例では、生きた歴史を学んだなどの感想も少なくないのだが。こうした理由として、団塊世代という戦後生まれの比較的若い世代が対象であること、米国では中高の社会科でオーラルヒストリーに類する体験をした学生が少なくないこと、アイデンティティ形成期にある若者たちだからなどの理由が考えられる。個人の生き方への関心も重要とはいえ、個人の生き方を通じて、より社会的・構造的な視点を養うような教育的工夫も必要ではなかろうか。ライフストーリー・インタビューは仮説検証型の研究方法ではないと桜井は言っているが、事前にある程度のテーマ設定を行うことや、事後の話し合いをクラスで設けることで、より豊かな成果が期待される。

また、双方向的対話への課題もあげられる。団塊世代の元気の良さに対して、大学生ももっと自己主張するところがあってもよいのではなかろうか。団塊世代の生き方に対して、反発や世代間ギャップを感じるところはないのだろうか。現代は若者が夢を抱きにくい時代であるといわれる。また、若者の夢はまだ宣言するところまでは至っていないという見方もある。しかし、逆に、若者自身が夢や生き方を語る機会があってもよかろう。若者の語りに、団塊世代はどう耳を傾けるのだろうか。一度のインタビューに終わらず、双方向的対話を育てる関係づくりが期待される。

インタビュー成功の要因としては、団塊世代と大学生の間には、同じく進路決定期にあり、「夢を追う」立場にあるという「共通の基盤」があることと、仕事から身を引く者から仕事に就く者へという世代継承の立場に両世代があることが考えられる。もう一つは、団塊世代が「夢追い塾」という学習組織的基盤を持ち、インタビューが大学生にとっても、団塊世代にとっても、学習活動の一環だったことも大きかったのではなかろうか。

4 ライフストーリー・インタビューの世

代間学習としての可能性

若者が世代間インタビューを通じて得たもの

米国のニューヨーク市立大の例、および日本の北九州の大学生と団塊世代の例と、2つの世代間ライフストーリー・インタビューの事例を検討してきたが、国の違いはあれ、大学生の感じ方に共通する部分が多いことに気づく。大学生が年配者

へのインタビューを通して何を得たのか、ルバルスキーの世代間インタビューに関する議論と大学生の感想文をつきあわせながら、①尊敬・親しみや共感、②人生への洞察や人生哲学、③高齢者への理解と固定観念の払拭、④地域や歴史への理解、⑤異世代とのコミュニケーションという5つの要素を抽出した。それを基に、日米の大学生の感想文を分析した。5つの要素は相互排他的なものではなく、相互関連しあう要素といえるが、要素間の関連などを詳しく調べることは後の課題とした。今回は、そうした要素に基づき、感想を分類した結果、一番多く見出せたのが、②人生への洞察や人生哲学に類するものであった。このことから、大学生が年配者へのライフストーリー・インタビューを通じて得るものは、人生への洞察力や人生哲学であることが推測される。

生成的学びと＜ストーリー領域＞

大学生が「生き方」を描くことができるような生成的学びは、ライフストーリー・インタビューを通じてどのように可能であろうか。大学生が最もインパクトを感じるのは、年配者の体験それ自体でなく、そうした体験を年配者がどう捉え、生き方や人生哲学に活かしているのかというストーリーが凝縮された言葉、すなわち、＜ストーリー領域＞であることが、日米の事例の感想文から明らかになった。学生はこうした言葉をメッセージとして受け止め、自らの「これから」に活かそうとするのである。ルバルスキーは、ストーリーに関わることを通して、若者も年配者のような人生への洞察力を得ることができると言ったが、それは、具体的には、＜ストーリー領域＞を通して受け渡されていくものといえよう。

高齢者とお決まりのストーリー

ルバルスキーが、今日の学校カリキュラムでは、人の成長や成熟の意味がストーリーから離れがちな事を指摘しているが、日米の事例は、大学の授業では得がたいストーリーによる学びが、世代間ライフストーリー・インタビューを通じて可能になっていることを示している。

とはいえ、「高齢者はいつも同じことしか言わない」「すべてお決まりのストーリーに結び付けろ」などという若者も少なくない。これは、相手や状況に関わらず、同じような教訓にしまうことを意味していると思われるが、こうした場合

は、「語り手と聞き手の相互行為」は機能せず、対話的構築は行われていないことを示している。「語り手の人生を解釈するのは、聞き手の「自己」の人生である」という桜井の見解や、「高齢者は彼らの人生に興味を持つ者には心を開いて語ろうとする」というパインの見解から考えられることは、こうした場合は、聞き手である若者側の「自己」も問われるということであろう。しかし、世代間インタビューを学習活動として実り多いものにするために、いくつかの工夫も必要であることが、日米の事例から明らかになった。

世代間インタビューを組織するために

世代間インタビューを学習活動として組織するための留意すべき点は以下のようにまとめられる。

① 老若の「共通の基盤」を探すこと

米国の例では、会話の際に「共通の基盤」を探すことの重要性をパインが指摘している。日本の例では、両世代が進路決定という共通の課題を抱えていることでコミュニケーションが成り立っていた。世代間の対話を発展させるためには、共通の趣味やコミュニティなどの話題を準備する必要があるといえよう。

② 支援する組織の役割が重要であること

世代間インタビューは、老若世代の当事者から自発的に起こってくるというよりも、教育的組織的な取り組みの中で、注意深く準備・運営されることで可能になることが明らかになった。米国の例における、大学コンソーシアムと介護施設、日本の例における、「夢追い塾」と北九州の大学の連携などをみると、その教育的意味を高めるためにも、インタビューを支援する組織の役割が重要であることがわかる。

③ 半構造化インタビューより自由に

やまだは、「ライフストーリー・インタビューは、半構造化インタビュー³⁶⁾よりも、さらに語り手の主体性を重んじる方法である。質問は、相手に生き生きと自己を語ってもらえるような引き金となる質問が望ましく、事前にできるだけ準備する必要があるが、現場では柔軟に相手に合わせて語りが生成されるプロセスを楽しみながら共に聞くのがよい」といっている。³⁷⁾

米国の例では、介護実践での課題ということもあり、質問は比較的構造化されていた。にもかかわらず、双方向的対話に発展したのは、世

代間、特に聞き手が大学生であるという気安さや楽しさが語り手（高齢者）側にあったのではなかろうか。北九州の例では、相手が地域リーダー育成塾の塾生ということもあり、団塊世代の方で事前に周到な準備がなされたようだ。

④ オーラルヒストリーとの線引き

日米両事例とも、本来ライフストーリー・インタビューとして位置づけられていたものではない。最近の例でいえば、*Journal of Aging*(2009)掲載の米国の類似例³⁸⁾も、九州の例と同じく、オーラルヒストリーとして紹介されている。オーラルヒストリーとの線引きは、必ずしも意識されているわけではない事が推測される。

今後の課題

本論では、若者の学びという視点に立脚したため、大学生による感想部分のみを紹介するに留まった。インタビューから若者が何を得たのか、感想文を基に5つの要素を抽出したが、この要素間の相互関係を調べることで、生き方の構築につながるメカニズムが明らかにできるのではなかろうか。また、本論で注目した<ストーリー領域>に関しても、生き方の形成につながる過程を明らかにするためには、グラウンデッド・セオリー・アプローチなどを参考に理論化を進める必要があるだろう。現在、筆者の勤務する専門学校でライフストーリー・インタビューの取り組みを行っているが、学生がまとめたライフストーリーをどう分析していくのか、インタビューの文脈から切り離されたライフストーリーの記録を理論化するための方法論を模索している。本論の成果を軸として、オーラルヒストリー分析なども参考に分析を進めたい。

以上のような質的研究方法上の課題に加え、世代間コミュニケーションの異文化間比較に関する課題も浮かび上がった。米国の世代間プログラムでは、参加者は老若とも平等な立場で交流するのに対し、日本では、世代間に不平等概念が存在し、若者は自分が話すより聞く方に回ることを期待されるという見解が存在する。³⁹⁾本論が取り上げた日米の事例においても、米国の例では双方向的コミュニケーションへの発展がみられたのに対し、日本の例では、若者が団塊世代から夢を指南されるといった感じが強い。日米の事例は、図らずともこうした見解を裏付ける結果となった

が、これに関しては、より多くの事例に関して比較検討を重ねる必要があると考えている。

注

- 1) 例えば、NPO 法人「昭和の記憶」(事務局東京都千代田区)が横浜市の特養ホームで開いた聞き書きイベントには、若者ボランティアが多数参加し入所者の半生について聞き取りを行ったという。2008.10.11(土)読売新聞夕刊
- 2) 御厨貴『オーラル・ヒストリー—現代史のための口述記録』中央公論,2002,p.5.
- 3) 江頭節子“社会学とオーラル・ヒストリー—ライフ・ヒストリーとオーラル・ヒストリーの関係を中心に”『大原社会問題研究諸雑誌』No.585,2007.8,p.19.
- 4) ポール・トンプソン『記憶から歴史へ—オーラルヒストリーの世界』酒井順子(訳),青木書店,2002,p.49,(Paul Thompson, *The Voice of the Past: Oral History*, Oxford, 1978, 3rd.ed., 2000.)
- 5) 中野卓・桜井厚(編)『ライフヒストリーの社会学』弘文堂,1995.
- 6) 桜井厚・小林多寿子(編)『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門』せりか書房,2005,p.8.
- 7) *Ibid.*, p.30.
- 8) *Ibid.*, pp.27-45.
- 9) やまだようこ“ライフストーリー研究—インタビューで語りをとらえる方法”<秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学(編)『教育研究のメソロジー』東京大学出版会 2005>pp.191-211.
やまだようこ“ライフストーリー・インタビュー”<やまだようこ(編)『質的心理学の方法—語りをさく』新曜社,2007>pp.124-131.
- 10) 桜井厚・小林多寿子, *op.cit.*, p.29.
- 11) ダニエル・ベルトー『ライフストーリー—エスノ社会学的パースペクティブ』小林多寿子(訳),ミネルヴァ書房,2003,p.31.
(Bertaux,D.&I.Bertaux,“Life Stories in the Bakers Trade” in D. Bertaux ed. *Biography and Society: The Life History Approach in the Social Science*, Sage, 1981)
- 12) 桜井厚・小林多寿子, *op.cit.*, p.36.
- 13) Lubarsky, N., “Rememberers and Remembrances: Fostering Connections with Intergenerational Interviewing”, In Brabazon, K. and Disch, R. (eds.) *Intergenerational Approaches in Aging*, The Haworth Press, Inc., 1997, p.143.
- 14) Dewey, J., *Experience in education*, Collier Book, New York, 1938.
- 15) Lubarsky, N., *op.cit.*, p.143.
- 16) *Ibid.*, pp.143-148.
Lubarsky, N. “A glance at the past, a glimpse of the future” *Journal of Reading*, 30, 1987, pp.520-529.
- 17) エリクソン, E. H. 『ライフサイクル, その完結』村瀬孝雄・近藤邦夫(訳), みすず書房, 1989, p.73.
- 18) Pine, P. P., “Learning by Sharing: An Intergenerational College Course”, In Brabazon, K. and Disch, R. (eds.) *op.cit.*, pp. 93-94.
- 19) *Ibid.*, pp.94-95.
- 20) Levison, Lee, “Choose Engagement over Exposure”, In *Combining Service and Learning: A Resource Book for Community and Public Service*. Volume1. Raleigh, NC; National Society for Internships and Experiential Education, 1990, pp.68-75.
- 21) Pine, P.P., *op.cit.*, pp.95-97.
- 22) Cuoto, Richard, “Assessing a community Setting as a Context for Learning”, In *Combining Service and Learning*, *op.cit.*, pp.251-265.
- 23) Pine, P.P., *op.cit.*, pp.96-99.
Kendall, Jane C. and Associates, “Principles of Good Practice” In *Combining Service and Learning*, *op.cit.*, pp.37-55.
- 24) Pine, P.P., *op.cit.*, p.98.
- 25) *Ibid.*, p.99-101.
- 26) Wigginton, E. “Service-Learning and Schools’ Three Roles” In *Combining Service and Learning*, *op.cit.*, pp.493-495.
- 27) Pine, P.P., *op.cit.*, p.100.
- 28) *Ibid.*
- 29) *Ibid.*, p.101.
- 30) 城戸宏史“大学生への生き様継承と団塊世代の気づき—団塊の世代オーラル・ヒストリー・プロジェクトの取り組み”『地域開発』vol.520, 日本地域開発センター, 2008.1, pp.38-39.
- 31) *Ibid.*, pp.39-42.
<http://dannkaisedai.nakamada.com/2007/05/56.html>, (2008.12.02 参照)
- 32) 特別非営利法人里山を考える会『夢追い人』2007, 『夢追い人 2』2008.
- 33) 特別非営利法人里山を考える会『夢追い人』*op.cit.*, 表紙.
- 34) 城戸宏史, *op.cit.*, p.41.
- 35) 特別非営利法人里山を考える会『夢追い人』*op.cit.* 『夢追い人 2』*op.cit.* から抜粋。
- 36) 半構造化インタビューとは、自由記述の調査

のように、質問項目に関する自由な回答を期待するが、枠組みは聞き手にあるというような形式。構造化インタビューでは、質問紙調査のように、はい、いいえで答えられるような詳細な質問項目を事前に作る。

やまだようこ“ライフストーリー・インタビュー” *op.cit.*, p.131.

37) やまだようこ“ライフストーリー研究” *op.cit.*, p.207.

38) Ligon,M., Ehlman, K., Moriello,G. “Oral History in the Classroom: Fostering Positive Attitudes Toward Older Adults and the Aging Process“, *Journal of Aging*, 3, 2009, pp.59-72.

39) マシュー・S・カプラン, ナンシー・Z・ヘンケン, 草野篤子(編)『グローバル時代を生きる世代間交流』加藤澄(訳) 明石書店, 2008, p.38.

Intergenerational Learning through the Life Stories Interviewing

Eriko Nakagawa [†]

[†] Part-time Lecturer at Chiba City Aoba Nurses' College

I suppose that young people who are going out into the world from school still learn how to design their lives from the life stories of older people. Today, we need some approaches to promote such intergenerational communications because it is getting harder for young people to communicate with older people in families or in communities. In this paper I introduce “life stories’ interviewing” as a tool to promote intergenerational communications. While “life stories’ interviewing” has recently been taken notice of as one of the approaches for qualitative research, in this paper I discuss intergenerational learning through such interviewing by concentrating my attention on their creativity. Through studying cases of “life stories’ interviewing” regarding older people as practiced in U.S. and Japanese college courses, I explain how to promote communications between young and old and what intergenerational learning undergraduate students have gained through “life stories’ interviewing.”

Keyword: Learning through Life Stories, Life Story Interviewing, Intergenerational Learning